

おうみ なおと  
逢見 直人

● 連合・事務局長

## トランプショックにおもう

2015年9月頃だったと思うが、20代の頃、異業種交流で勉強会をしていた仲間同士で久しぶりに会って、飲みながら近況を語り合った。その内の一人がアメリカ経済の調査をしていたので、話題が大統領選挙のことになった。当時は誰が本命とも言えない時期で、下馬評の段階ではあったが、「もしトランプが大統領になったらとんでもないことになる。まさか、そんなことにはならないと思うが・・・」と語っていた。

私は、それまでトランプ氏のことをよく知らなかったので、あまり気かけずにいたが、トランプ氏は暴言を繰り返しながらも共和党の大統領候補となり、ついには多くのマスコミの予想を裏切って、第45代大統領に選ばれてしまった。これは「史上最大の番狂わせ」と言われている。これがスポーツの試合なら一興として片付けられるが、次期米国大統領のこととなると、まさにショックであり、この先どうなるかが気にかかる。

### なぜ、「世紀の番狂わせ」が起きたのか

なぜ、多くのマスコミはトランプ候補の勝利を予想できなかったのか。さまざまな報道がなされているが、「隠れトランプ票」を把握できなかったというのが原因だったらしい。クリントン氏は20年以上の長きにわたり政治の表舞台にいて、大統領候補としては申し

分のない経歴の持ち主である。一方、トランプ氏は、不動産王として有名ではあるが、政治家としてのキャリアは全くと言っていいほどない。

トランプ、クリントン両氏のテレビ討論はのしり合いで終始した感があった。「史上最低の大統領選」とも言われ、選挙戦終盤では、クリントン氏が公務に私的なメールアドレスを使っていた問題でFBIが再捜査を始めたことが影響を与えるとの見方があったが、それも投票日直前になって、FBIは「クリントン氏を訴追せず」との結果を明らかにした。一方、トランプ氏は過去の女性蔑視発言が問題視され、このような選挙に嫌気がさした米国民も少なくなかったと言われている。しかし、こうした中で、トランプ氏が勝利したのは、経済や社会から取り残されたと感じる人々の怒りや不満が鬱積し、現状打破に期待してトランプ氏に投票したからだと言われている。

### 民主主義の危機の始まり？

今回の大統領選挙の結果は将来に大きな不安の影を落としている。第1の不安は、これが民主主義の危機の始まりとなるのではないかということである。

自由と民主主義は、人類がこれまでの政治的統治体制を経験してきた中で、普遍的価値



を持つと認識されている。もちろん民主主義は絶対ではない。民意は時として冷静さを欠くことがあり、ポピュリズムに陥ってしまう危険がある。民主主義は、常に公的利益のみをめざす共同体の意思の決定に際し、国民が主権者としてその過程に参加し、そのようにして決定されたものについてはこれに従うという思想である。民主制の下で決められる「意思」はあくまで公的利益のみを目指す共同体意思であって、私的利益追求とは明確に峻別されなければならない。これが民主主義の基本である。

だがトランプ氏は、大統領就任後もホワイトハウスでビジネスをしようとしているように見える。「アメリカ第一主義」、これを国益と捉えるなら、すべての国は国益を第一に考えている。しかし、それは他国が犠牲になってもいいというのではなく、他の犠牲を少なくしつつ、自国の利益も考えるというのが国際的な民主主義というものであろう。アメリカは大国である。そのアメリカが、他国の犠牲を考慮しないとすれば、それは世界秩序の破壊につながる可能性がある。

### 不健全なナショナリズム台頭の不安

第2はナショナリズム台頭への不安である。

健全なナショナリズムは称賛されるべきであろう。健全なナショナリズムとは、自らの

母国を誇りに思い、自国の発展に尽くそうとする高い志のことである。しかし、不健全なナショナリズム、すなわち排他的ナショナリズムは世界の平和と安定にとって有害である。

自由とは、何者にも拘束されない状態、解放された状態をいう。しかし、自由は気まま、放縦とは別のものである。自由はまた、相互の人格と自由を尊重し、権利と義務の裏付けがあって初めて成り立つものである。自分の自由を主張するだけでなく、相手の人格や自由も尊重しなければならない。

昨年6月、イギリスでEU残留を強く訴えていたコックス下院議員が殺害されたが、その犯人は「ブリテン・ファースト（英国第一）」を叫んでいたという。トランプ氏の唱える「アメリカ・ファースト」が、他国からの移民や、異教徒に対する偏見や差別を助長することがあってはならない。トランプ大統領の誕生によって排他的ナショナリズムが広まらないよう願っている。

トランプ政権は、戦後最も不確実性の高い政権と言われている。この不確実な政権に、日本も含め、世界は立ち向かわねばならない。考えて見れば、これまでも不確実であった。こうした中でも人類は叡智を積み重ねながら困難を切り開いてきた。過去を振り返った時、後悔しない1年としたいものだ。